

## 最優秀賞

テーマ2..医療と福祉、わたしの体験  
「私は門前の小僧である」

宮崎県立宮崎西高等学校3年 大仁田 健

ピンポン。真夜中にインターホンが鳴り響く。隣で寝ていた母が、枕元においてある白衣をひっかけて階段をおりる。しばらくすると患者さんとの対応を終えて、また布団の中に潜り込む。週末は何度も呼び出され、そんな日の朝は起こされた母ではなく、寝ていたはずの父が不機嫌な顔で黙っている。きつと母の体調を心配してのことだろう。

私の自宅は薬局である。生まれてから、ずっとここで過ごしてきた。薬局の横の遊び場だったスペースが自然と勉強部屋に変わり、薬剤師としての母の仕事ぶりを見ながら大きくなった。薬剤師が調剤室で薬の調合をして、薬の販売をするだけではないということを知っている。

母は薬理学講師、介護審査委員、薬物乱用防止指導員、保健所運営委員、スポーツファーマシスト、学校薬剤師などさまざまな役目を担っており、その中でも多職種の方との協働を積極的に取り組んでいる。これからの薬局は処方箋の応需だけでなく、患者さんが医薬品、薬物療法などについて安心して相談できる場所であり、さらに多職種や他機関と連携して地域包括ケアに貢献していかなければならない。そうした新しい情報を得るために、ほとんどの隙間時間は研修会で埋められていく。薬局では、母はひたすら患者さんの話に耳を傾けている。長時間過ごされた後、すっきりした明るい顔になって戻られる患者さんをたくさん見てきた。父はというと、その話の途中に出てくる解決できそうな問題に駆り出されるのだ。商品の配達はもちろん、ハチの巣の駆除、電池交換、道案内など、母が目当て合図するとすぐさま出勤し、まさしく阿吽の呼吸である。この両親の仲の良さも当薬局の推しであった。

私が中学生になると、勉強部屋へ顔を出し、「あと頼むね。頼むよ」と言っただけで帰られる患者さんが増えてきた。両親と同じようにできるだ

ろうか。本来の薬剤師の役割ではない雑用が多過ぎるのではないか。そんな不満や疑問が頭をよぎる。

そんな私の考えが一変した。中2の春、父が急性心不全で、たった2時間ほどでこの世を去ってしまった。父の送迎で通っていた中学校。両親二人で切り盛りしていた薬局。これからどうなるのか不安でいっぱいだった。とにかく、いろいろ考えずにやるだけやってみようというのが母との結論だった。

葬儀が済んですぐに、通学と薬局営業を再開した。慣れない母の運転に不安を感じながら、夕方、いつもの時間に現れた車を見て安堵した。車中、今までなら爆睡していた移動時間もなぜか眠らなかつた。そして、薬局についたその時、目の前の光景に驚いた。閉まっているはずの店舗内は明るいままで、常連の患者さんたちが掃除や夕食の用意までしてくれていた。その後しばらく手伝ってくれたおかげで、何とか生活のリズムが整い、転校や閉局も免れたのである。

常に母の方が患者さんを支えているのだと思っていた。小さいころは、急用でもないのに私と母との貴重な時間を費やしている人たちだと恨めしく思っていた。でも、そうではなかったのだ。薬剤師という仕事を通じて信頼関係を築き、お互い助け合いながら生きている。そのころから、少しずつ将来について具体的に考えるようになった。この薬局の後継者となり、母を支えていこう。そして、これまで私の成長を見守ってくれた地域の方々に恩返しをしたいと思う。

たしかに私は門前の小僧ではあるが、習わぬ経を読むはずもない。しかし患者さんが薬剤師に何を求めているかは、両親を通して感じてきたつもりだ。

これから専門的な知識をしっかりと学び、病気やけがなどで患者さんが抱えているさまざまな不安を、少しでも和らげてあげられるような薬剤師になりたいと心に決めた。